

共同体と村

—日本語のなかのコミュニティと共同体—

三 保 元

はじめに

フランスの社会学者であり、ジャーナリストでもあったレーモン・アロンの回想録⁽¹⁾を訳し始めてから、もう六年にもなってしまった。ようやく翻訳は終わったが、九百頁に及ぶ大部な著作のことで、文体を統一する必要があるが、再読していた。そんなとき、ふと目に入った一節があった。

フランスの聴衆の抵抗は、挑戦的である。ソルボンヌで、私は最後まで、数百の顔をあの数百の若者の精神を、魅了しようと堅い決意で講義に臨んだ。はじめから私の側にいた学生もいたし、反抗的な学生もいた。そういう聴衆を、私は、ことばによって交流可能な一つの開かれた共同体に統一しようと夢見ていた。

Jusqu'au bout, à la Sorbonne, J'attaquais mes cours avec le ferme propos de conquérir ces centaines de visages, ces centaines de jeunes esprits, les uns certes gagnés d'avance, mais, les autres rebelles, que je rêvais d'unir, par la parole, en une communauté accueillante.⁽²⁾

ヨーロッパつまりロシアの国境と大西洋のあいだにある民族国家の復興は、第三帝国、または、平和的共同体のなかで、その位置を占めるものの再統合なしには、まったく、考えられない。

La renaissance de l'Europe, c'est-à-dire des Etats nationaux situés entre la frontière de la Russie et l'Atlantique, n'est guère concevable sans la réintégration du Reich ou de ce qui en tiendra lieu dans une communauté pacifique.⁽³⁾

この二つの引用が目にとまった理由は、どちらにも、communauté という単語が使われていることだった。第一の引用は、1955年、ソルボンヌの教授となったアロンが、アメリカやドイツの学生に比べて、反応を顕にしないフランスの学生を引き付けようとする努力を語っている部分、したがって、ここでの communauté は、学生の集団である。第二の引用は一九四七年二月七日付けの「コンバ」(*combat*)紙⁽⁴⁾に掲載された、ドイツの脅威についての論説記事で、この communauté は、おおざっぱに言えば、国家の集団である。⁽⁵⁾

私はこの単語をどちらの場合も一応、共同体と訳してみたが、原文の文脈で、この単語がもつ意味を訳しきれていないようで、歯痒い思いだった。このことがきっかけとなってコミュニティ(コミュニティと“ー”を用いて表記する場合もある)と共同体、という語が、なぜ、日本語で併用されているのか、という疑問など、日頃から気になっていた communauté の訳語をめぐって、とつおいつ、考えることになった。本稿では、その試行錯誤の跡を辿り、一応、随想的な形でまとめた。結果的に、言語学的な次元と、社会科学的な次元が交錯し、いささか明晰さを欠く論考になったことをあらかじめ、おことわりしておく。

COMMUNAUTE, 共同体, COMMUNITY

私は、はしがきで、フランス語の communauté (コミュニテ)、日本語の共同体、コミュニティ(英語:community)の三つの単語を用いているが、英語の community と、フランス語の communauté は、ほぼ、同義だとどの了解があるかのような印象がある。

英語の community が古フランス語の communité の借用であることを思えば、同義だと考えてもよいが、現用で、仏英の相互に本稿で考慮すべき顕著

な意味の差異があるかを、手元の *Longman Dictionary of Contemporary English* (以下 LDCE), 『講談社学術文庫・英和辞典』(以下, 『英和』), *Le Petit Larousse* (以下PL), 『ロワイヤル仏和中辞典』(以下, 『仏和』)を参照して、確認しておく(煩雑さを避けるため、例文は必要最小限のみを記す)。⁶⁾

LDCE: 1. a group of people living together and/or united by shared interests, religion, nationality, etc. 2. a group of plants or animals living together in the same surroundings, usually dependent each other for the means of existence. 3. closeness; nearness; likeness: They were united by community of interests. 4. shared possession. 5. also religious community -- a group of men and/or women who lead a shared life of prayer and work according to a set of religious rules they have promised to obey. 6. the public; people in general: The job of a politician is to serve the community.

PL: I. 1. Etat, caractère de ce qui est commun; similitude, identité. Communauté de sentiments 2. Régime matrimonial légal des époux mariés sans contrat; bien acquis pendant le mariage. II. 1. Groupe social ayant des caractères, des intérêts communs, ensemble des habitants d'un même lieu, d'un même Etat. 2. Ensemble de pays unis par des liens économiques, politiques, etc. Communauté européenne. 3. a. Group de personnes vivant ensemble et poursuivant des buts communs. b. Société de religieux soumis à une règle commune.(以下省略)

『英和』: 1. 政治・文化・歴史をともしする社会, 共同社会, 共同体。
2. 地域(共同)社会, 一地域の人々全体。3. 公衆。4. 〈動物〉, 〈植物〉の群棲, 群落。5. 思想, 利害などの共通, 一致, 類似。6. 〈財産〉の共有, 共用。

『仏和』: 1. 共同, 共有。~de goût 共通の趣味。~des idées (de langue) 思想(言語)の共有。2. [夫婦の]共通財産[制]。3. 共同体。(以下一部省略)~

familiale 家族共同体。～économique 経済共同体。～linguistique 言語共同体。
 ～culturelle 文化共同体。～religieuse 修道者共同体，修道院。Communauté
 européenne ヨーロッパ共同体。

それぞれの辞典の編纂方針によって、語義の配列は異なるが、英仏両国語での差異は、“動物，植物の群棲，群落”と“公衆”の記載が、PLにも、仏和にもみられない点を除くと、他は、ほぼ、同義として扱ってよいと考えられる。前者については、フランス語では *colonie* を用いる。⁷⁾ 後者が欠落している点は、LDCEの例文から推す限り、PL II.1の語義，*ensemble des habitants de même lieu, d'un Etat* の範列線上にあるといえる。

Paul Robert の *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française* では: *Communauté d'habitants: groupe d'une commune jouissant de certains droits pour des raisons diverses*, とされ、*humanité* の項に送られている。英和の訳語“公衆”からは、フランス語の *public* (名詞) が考えられるが、この名詞は、古くは、一般的に“国家”の意味をもっていたが、現在ではむしろ“大衆”または、管理者に対する一般人の意味で用いられている。*humanité* は、人類全体、人間集団の総体を表すから、Robert の辞典の送りは、当然だといえる。

日本語の“コミュニティ”

コミュニティということばをはじめて聞いたのは、もうずいぶん古いことになるように思う。ミッション系の学校で教育を受け、そこで聞いたのがはじめてだった。英語が敵性語だとされた戦時中でないことだけは確かだが、戦前だったのか、戦後だったのか、定かでない。それは、修道女の共同生活を意味して用いられていたようだ。もっとも、聞いている私には、それがどういう意味をもっているのかは、よく分かっていなかった。コミュノテと発音は異なったが、おなじことばを、1950年代初期に、フランスでも聞いた。意味は同じだった。

上記の辞典の記述にみられるように、この単語は、英仏両国語で、一般的

な意味での community, communauté とは区別され、独立した語義をもつ表現として扱われている。英和では、独立して扱われていないが、⁶⁾ 大型の辞典、【岩波英和大辞典】では、(学校、同宗同業の)共同生活体の項に a religious community 宗教団体と記載されている。しかし、いずれの場合にも、キリスト教と特定してはいない。したがって、英語が使えなかった戦時中は、僧院、尼僧院、といわれていてもいいことになるが、仏教との区別を明確にする意図が働いて、おそらく、修道院といわれていたと推定する。現に、広辞苑では、第二版から第四版まで、僧院の項目の語義に、修道院と記載されているし、文学作品では、スタンダールの【パルムの僧院】の例にもみられるように、現在でも用いられている。もっとも、僧院、という語には、どこか古めかしいところがあり現代の作品では、修道院と訳されるのではないかと思う。しかし、私の個人的な体験であるとはいえ、修道院ではなく、コミュニティといわれるには、別の理由があると考えられる。たしかに、修道という語は規律や規則、戒律を想起させるが、そこには、必ずしも、複数の人間の共同生活を思わせる要素はない。一方、院は、囲いをめぐらした建物、の意味をもち、学校、寺、役所など複数の人間が出入りする場所を指すが、やはり、共同生活の意味は薄い。そうであれば、場所と生活様式・規範を一括りにする外来語のコミュニティを用いるのが早道と感じられたと推定できる。いうまでもなく、外来語が、容易に用いられたのは、日本語の柔軟さ、許容度の高さによるし、別の角度からいえば、“舶来”に弱い日本人の特性でもあろう。しかし、そうとばかりもいえない例もある。

1950年頃、コミュニティ・チェスト(コミュニティーチェストの表記もある)ということばが聞かれるようになった。これはいまでは、共同募金として、毎年、十月になると、街頭で耳にし、目にすることばだ。しかし、当時、学生で、実際に募金をしていた私にとって、このことばは、街頭募金という意味しかもっていなかった。つまり、コミュニティにも、チェストにも、独立した意味が感じ取れなかったのだ。意味合いは異なるが、共同募金ということばにも、私はこの募金をもつ共同体内—あるいはコミュニティ内

一での助け合いの意味を感じ取ることができない。どちらの表現も、街頭での募金と赤い羽根という具体的なイメージとの結びつきが強すぎて、分析してみる気にならないからなのだろう。このことは、辞典の見出し語をみても分かる。たとえば、広辞苑や新聞語辞典では、コミュニティ・チェストは、複合語として扱われている。さらに、見出し語の変化をみると、直訳に近い共同募金という表現が、深い意味をもたないまま、具体的なイメージと合体する形で、二十年ほどで定着してしまったのが、ほぼ、明らかである。

試みに、1955年版の『新聞語辞典』をみると、共同募金という見出しはあるが、コミュニティ・チェストの項に送ってある。64年版では、逆の形になっていて、67年版になると、コミュニティ・チェストの見出しがなくなっている。同様の取り扱いは、『広辞苑』の第二版(1969年)と第三版(1983年)にもみられる。こちらは、『新聞語辞典』より一層明確で、第三版では、コミュニティの項目にあった記載が削除されて、見出し語「きょうどう」(共同)のなかの一項目、共同募金の項に community chest の訳語、と、原語で記載されている。1983年の第三版、1991年の第四版では、⁽⁹⁾ まったく変化がない。共同募金が日本に導入されたのは、戦後間もない1947年で、55年の新聞語辞典の記述からみると、コミュニティ・チェストが、ほぼ十年近く、一般に使われていたといえるだろう。さらに、広辞苑の第二版が、1969年で、新聞語辞典の記述に変化が認められるのが、1967年であることを考慮すると、日本語と外来語の併用期間もほぼ十年間であったと推定できる。⁽¹⁰⁾

訳語の共同募金についてみると、たしかに、community, communauté には、共同、という意味はあるが、この募金の起源が、スイスの山村での助け合いであることを考えると、コミュニティには、村落共同体⁽¹¹⁾の意味があるのみなければならない。だが、かりに日本語で村(ムラ)といったのでは、日常的な感覚では、村落という場合とは異なった意味合いをもつと感じ取られる。(もっとも最近では、村起しなどの表現に共同体的な意識が感じられるが。)冗長になるが、意味をくんで訳すなら、共同体内助け合い募金箱、ということになる。それなら、かつての日本には、頼母子講、無尽講、

といった、相互扶助組織があったのだから、修道院の場合のように、併用することも、不可能ではなかっただろうが、頼母子講では、時代錯誤だ、といわれるかもしれない。しかし個人的な体験で、五十年あまりまえのことではあるが、鎌倉のある商家で、隣家の人が、錢箱を下げて、無尽講の募金にきていたのを記憶している。講は、具体的な一種の募金あるいは預金としてそれほど遠くない昔に実在していたようだし、現在も、仏教寺院の参詣の講はある。簡潔で分かりやすい訳語は考えつかないが、さしずめ、共同体相互扶助錢箱、とでもいえば、併用が可能だったとも考えられる。

いずれにせよ、コミュニティ・チェストに関しても、訳語に問題はあるが、旧来の日本の相互扶助の組織・運動とは異なる運動であり、募金の目的が講のように、ある種の見返りを想定したものではない点を明確にしたいという意識が働いていて、僧院→コミュニティ、と同種の分岐が起きているといえる。どちらの場合にも、既存の表現に欠如しているのは、共同の目的意識をもって行動する人間集団の概念である。前者については、さきに記したとおり、宗教的な共通の目的をもって生活する集団の意味が薄いところからの分岐が起きており、後者の場合は、集団が地域集団であり、その集団が共通の目的—相互扶助—をもっている、という点を明らかにするという意図で、一時的にもせよ、外来語と日本語の表現が併用されている。ただし、外来語⇔日本語の方向が逆である点には、注目する必要がある。僧院(修道院)→コミュニティでは、関係する集団がキリスト教(カトリック)であり、限られた集団の中だけで用いられ全国的な統一あるいは周知徹底の要請はないのに対して、コミュニティ・チェストは、全国的で中央主導型の募金運動であることが、方向の逆転の理由だといえる。つまり、共同募金が根付いた年代から推して、全国的な規模で募金をおこなうには、耳慣れない外国語より、意味が多少、不鮮明でも、親しみやすい日本語を使うほうが募金を容易に浸透させられる、と中央が判断したのだ。これは、いわば、一種の言語統制でもあったわけだ。

COMMUNAUTEと共同体

上述の二つの例は、個人的な体験から思いつくままに拾いだしたのだが、現在では、コミュニティという語は、たとえばコミュニティ・センター、コミュニティ・スクールなどと、身近なところで、よく耳にし目にする。ただし、辞典をみると、編集方針によっても考えられるが、『広辞苑』では、両語ともコミュニティの項に記載されているが、『岩波国語辞典』では、1968年の第四版(1989年に第五版発行)でも、コミュニティの見出し語すらない。いずれにしても、1992年現在、50年代には、耳慣れない外来語だったコミュニティは、社会学、人類学、歴史学の専門用語としてではなく、日常的に用いられることばになっている。と同時に、ヨーロッパ共同体などにみられるように、並行して、日本語の共同体も用いられるようになった。この現象が起きた理由をより正確に見極めるには英仏両国語の community, communauté の語源を調べる必要がある。

英語については、さきにもたとおり、古フランス語の借用であると考えられる。フランス語では、O. Bloch et W. von Wartburg の『フランス語語源辞典』では、この単語は、形容詞 commun の項目に派生語として記されている。commun の語源は、ラテン語の communis で、communauté は、共同生活をする人々の集合体を表す名詞 commune(形容詞 commun の女性形)からの派生語とされ、おそらく、1284年初出の古フランス語 communité の変形であろうという。⁽¹²⁾ 現代フランス語では、形容詞 commun は、共通の、共同の、共有の、一般の、普遍的、公共の、の意味をもっているから、communauté の語義に、共同、共通、の意味があるのが分かる。ただ commun のほうには、上記の意味のほかに、おそらく、一般の、普遍的といった意味からの派生であろうか、普通の、平凡な、卑俗な、粗野な、という意味まである。

それでは、日本語の共同体は、どのような成り立ちであろうか。いうまでもなく、この単語は共同、と、体から成り立っている。共同は、明治25年(1892年)刊行の山田美妙編『日本大辞典』によると、漢語、衆人が寄って事をする事、と定義されている。明治37年(1904年)の『言海』には、共々に物事

をなすこと、もやひ、とある。“もやひ”は古語で、本来は、舟と舟をつなぎ合わせることを意味し、派生的に、共同してすること、の意味をもつ。和語のもつ具体的なイメージが、実に美しい。この語は、現在でも使われている。体(タイ)は、この場合ドイツ語 Körper の訳語とみなされるから、共同、のもつ意味から考えると、共同体、とは、日常的な感覚では、いっしょに物事をする集団、と受け取られているとみてよいことになる。

ヨーロッパ共同体の場合には、メディアの発達もあって、日本では、この表現が日常的にも、ただ単に共同して物事をなす集団というだけではなく、共通の目的をもって行動するブロック化した国家集団、社会、として捉えられるようになってきているといえよう。また語彙の変遷の観点からみれば、この場合では、共同体は、共同、と、体との複合語ではなく、ヨーロッパと結びついて、独自の意味をもつ単語となっているといえるが、一般庶民にとっては、実感の薄い“ことば”であることに変わりはない。ことに、国土に国境をもたない日本では、西欧型の国家と共同体の差異は、感覚的に把握するのが難しいのではないかと思う。したがって、ヨーロッパ共同体、という複合名詞は、少なくとも経済的には日本に対する異国、一つの国名として意識されていて、別の意味が附加されている外来語のコミュニティを用いない、ともいえよう。

だが、おなじような混乱は現地にもある。1993年のヨーロッパ統合に向けてのマーストリヒト条約の批准、国民投票などに際して、現地では、国家主権と新ヨーロッパ共同体の関係が、一般庶民には明確に理解されず、フランスの国民投票の場合などに、世論の混乱がみられた。社会的、歴史的な複雑で重層的な一種の“うねり”にも似たこの動きを単に、語彙の面からだけみるのは暴挙に近いが、あえていえば、フランスの庶民は、Communauté と Etat の語彙としての差異が明確に理解できないまま、1992年9月20日の国民投票に臨んだのではなからうか。賛成、反対の票差が僅差であった原因はその辺にあったのではないかと思われる。政治家もこの辺をじゅうぶんに意識して、反対派も賛成派も、ものをいっていたようである。世論操作の具体

例を目のあたりにしたようで、恐ろしい気がしたが、本稿が上梓されるころには、明確な答えが出ているだろう。

ヨーロッパ共同体の場合にみたように、日本語で、日常、コミュニティという語が用いられるのは、社会科学の分野の専門用語としてではない。専門用語では、community、ドイツ語の Gemeinschaft(共同社会とも訳される)の訳語として当初用いられた共同体が、次第に日本語として定着した。では、コミュニティ、という語は、なぜ専門用語以外の場合に使われるのか。もちろん、カタカナ語が多用される現在のことだから、共同体、と漢字が並ぶより、このほうが、少々、古い表現だが、ハイカラだ、ともいえるが、それよりもこのことばに、共同体には感じ取れない、共同で物事をなすという意味が転移してきているのではないかと考えられる。原語の意味とは無関係に、日本語のなかで、この単語が原義を取り戻している、と考えるのは誤りだろうか。だが、このような解釈が仮に成り立つとしても、レーモン・アロンの文中の *communauté* の適切な訳語として、コミュニティを採用するわけにはいかない。

第一の引用では、むしろ、完全な意識をするべきなのかもしれない。しかし、教壇に立つ一人の教師として、強く実感するアロンの心情を、どう表現するのが適切なのか分からない。駆け出しの教師時代ばかりかいまもお、ときに、白壁のまえに立ったような気分になってしまうことがある。それは、学生と私とのあいだに、通い合うものが欠けているときのことだ。フランス語の *commun* の語義に、共通の、普遍的な、という日本語にあたる状態を指す、と考えるのが妥当かもしれない。だが、それでは、形容詞の *accueillant(e)* をうまく取り込めない。その結果が冒頭に引用した稚拙ともいえる直訳になってしまった。第二の引用については、躊躇なく、共同体、と訳した。この一節が、1947年という戦後間もないヨーロッパで新聞に発表された論説であり、東西ドイツ分割が、戦後処理の大きな問題であったこと、また、文中にある Reich との対比において、*communauté pacifique* という表現が用いられていることから、ここでは、共同体以外に訳語はない。そこに

は、ナチズム台頭の1930年をドイツで過ごしたアロンの複雑な思いがこめられている。アロンにとっては、ナチ以前の統一ドイツ不在のヨーロッパはあり得なかったのだろうが、同時に、ユダヤ人であるアロンにとって、ナチズムのドイツは、あまりにも重い存在だった。pacifique 平和的などという形容詞、そして、共同体、という名詞の結びつきは、アロンにとっては、象徴的な意味をもっている。

おわりに

アロンの翻訳をきっかけに、communauté, community, 共同体, コミュニティの用法について考えるうち、一般的な意味でのコミュニティ、という日本語の単語は、たとえば、村(ムラ)という単語に置き換えて語ることができるだろうか、という疑問が浮かんだ。それは、やや唐突ではあるが、西欧でコミュニティという語がもつ意味での人間社会が、日本にはない、あるいは、成立が困難なのではないか、という疑問でもあった。

いうまでもなく、村(ムラ)は群れと同語源であり、都会に対する田園地区、あるいはいなかの複数の人家の集合体を表す。同じ漢字をソソと読めば、市町村のような表現にみられる地方公共団体を表す。語源的にみればムラは、たしかに複数の人間のまとまりを表し、また、村八分といった否定的な表現にもみられるように、ある種のまとまり、あるいは共通の目的をもつ集合体、共同体、だと考えられる。だが、学問的な日本社会の構造論はさておくとしても、日常的には、情の面での人間の繋がりが優先し、共同体としての意識が薄い場のように感じられる。そこでは、共々に物事をなすことが、一蓮托生的な、個の存在を忘れた共同作業であることが多いように思われてならない。

コミュニティ・チェストの項で、村落共同体という表現を用いたのはそのような気持ちがあったからだった。ムラという単語の語感には、アロンがcommunauté accueillanteというときに、意味する、強烈な個と個のぶつかり合いから生じる共生の感覚がない。共々、真の連体感覚の未熟さ、いうなら

ば民主主義の未熟さの表れであるように思われる。その意味では、コミュニティということばが、たとえその意味の正確な理解なしに用いられているにしても、次第に、日本社会に浸透してきていることは、個の集団としての社会が形成されつつあること、日本が変わりつつあるのを、示唆しているのかもしれない。

注

- (1) Raymond Aron, *Mémoires. 50 ans de réflexion politique*, Julliard, Paris, 1983.
- (2) 同上, Presses Pocket版, 489頁。
- (3) 同上, 294頁。
- (4) *Combar*: 1941年創刊のフランスの日刊紙, 当初は, 非合法出版。戦後合法化され, 1947年に廃刊。レーモン・アロンは, 1946年に寄稿しはじめ, 同紙で政治評論を担当。
- (5) アロンのこの論評は, 当時, 問題となっていた東西ドイツの分割について, *Une autre Allemagne* (もう一つのドイツ) と題して書いたもの。
- (6) 本稿に引用した辞典は, それぞれに, 編纂方針が異なり, 語義の配列については, 差異がある。また, 辞典の性格も, 語学辞典と百科事典の差異がある。あくまで, 手軽に使えて, 誰でも見る機会がある辞書を, という意図からの, きわめて日常的で, 多分に恣意的な選択である。また, 英文, 仏文の訳を添えなかったのは翻訳によって, 私自身の解釈を付け加えるのを避けたかったからだ。
- (7) フランス語の *colonie* には, もちろん, 植民地の意味もあるが, その他に, 在外の同国(同郷)人の集団(会)の意味ももっている。 *communauté* との違いは, 同国, 同郷であっても, 目的を一にしない点だといえる。
- (8) 『英和』で, この項目が独立して扱われていないことは, 見方によっては, 日本での宗教一般についての関心の薄さを示しているともいえる。
- (9) 『広辞苑』の奥付には, 第三版と第四版のあいだに注目すべき変更がある。第三版までは, 発行年月日が元号の昭和で記載されているが, 平成三年に発行された第

四版では、元号は用いられず西暦で記されている。

- (10) いうまでもないが、辞典の編纂は、長期にわたり、ことに、コンピュータが用いられていなかった50年代、60年代では、発行年と現実の言語の変遷との誤差は三年から最長十年、またはそれ以上はあると考えなければならない。
- (11) ここでは、厳密な意味で村落共同体、という表現を用いているのではない。
- (12) 参考までに、「語源辞典」(*Dictionnaire Etymologique de la langue Française*)の原文を記す。

Commun: Fém. en-e dès les premiers textes. Lat.communis.--Dér.: communal. XIIe; sert aussi à commune, depuis la Révolution, d'où communauté (1284, probabl. refait de l'ancien français, communite, emepr. du lat. communitas, d'après l'adj. communal)後略。

参考書目

(本稿の性質上、辞書名のみ、本稿中の記載順に記す。)

1. *Longman Contemporary English Dictionary*, Longman Group Ltd, 1978.
2. *Petit Larousse Compact*, Larousse, 1992.
3. 『英和辞典』, 編集主幹川本 茂雄, 講談社学術文庫, 講談社, 1979年(1990年第六刷)。
4. 『ロワイヤル仏和中辞典』, 編者 田村 毅, 他, 旺文社, 1985年初版。
5. *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, Paul Robert Société du nouveau Littré, 1963.
6. 『岩波英和大辞典』, 編者 中島 文雄, 岩波書店, 1970年。
7. 『広辞苑』, 新村 出 編, 第二, 第三, 第四版, 岩波書店, 1969, 1983, 1991年。
8. 『新聞語辞典』, 朝日新聞社, 1955, 64, 69年。
9. 『岩波国語辞典』, 編者 岩淵悦太郎, 西尾 実, 水谷 静夫 編, 第四版, 第五刷, 1989年。
10. *Dictionnaire étymologique de la langue française*, O.Bloch et W. von Wartburg, Presses Universitaires de France, 1975.
11. 『日本大辞典』, 山田 美妙 編, 1892年。

12. 「言海」, 大槻 文彦, 富山 房, 1904年(復刻新版)。

(その他, 本文中に記載のないもの。)

1. 「文化人類学辞典」, 弘文堂, 1987年。
2. *Grand Larousse Encyclopédeque*, Librairie Larousse, 1980
3. *Quid 1993*, Dominique et Michèle Frémy, 1992.